

ヨーロッパの沿革とエルヴェシウス家の源流

—— 評伝 エルヴェシウス家の人々（その一） ——

永治日出雄

第二節 ヨーロッパの沿革とエルヴェシウス家の祖先

(一)

紀元前五八年ローマ軍五個軍団を率いるカエサルは、アルプスの渓谷を越え、現在のジュネーヴやフランス中東部に進攻した。折しもジュラ山脈の麓から地中海方面へケルト系の部族が大挙移動しつつあり、パリ南方のオートタン付近でローマ軍と激突する。この精悍な部族はかねてローマ人からヘルウェティー族 (Helvetii) と呼ばれ、ライン河南岸よりレマン湖畔へ至る地域に住んでいた。女や子どもまで加わるヘルウェティー族二六万人の抗戦を、カエサルは『ガリア戦記』第一巻につきのとおり誌す。

この二重の戦闘は長くかつ激烈であった。彼らは我軍の攻撃を防ぎ切れなくなると、一方では当初のように高地へ退き、他方では荷物と運搬車のもとに集まった。戦闘は七時から夕方まで続いたが、この間に背を向け

て逃げる敵を見た者はいない。荷物の周りでは深更に至るまで戦闘が続いた。これら蛮族は運搬車で堡壘を作り、肉迫する我軍にその上から矢を浴せた。また、彼らの若干は運搬車や車輪の間より矛と槍を投げ、我軍の兵士を殺傷した。長い戦闘のあとに彼らは荷物と陣地を奪い取った。(中略) ヘルウエティー族との戦争が終ると、ガリアのほとんど全域から部族の首領が使節としてカエサルのもとへ祝賀に来た。そして、以下のとおりよく理解していると云った。すなわち、この戦争でカエサルがローマ民族に対する積年の狼藉に仕返しを果したが、こうした出来事によってローマもガリア諸国もやはり恩沢を受ける。なぜなら、富み栄えつつもヘルウエティー族は、全ゴールに挑戦して支配者となるため、またガリアのなかでもっとも快適で豊饒と思われるところを居住地として選び、ほかの民族に貢物を強いるため、従来土地を棄てたのである、と。

不敗のローマ軍と敢えて干戈を交えたヘルウエティー族こそ、史書に登場する最初のスイス人である。敗北したこの部族はカエサルの命令でライン河南岸へ戻り、一度は放棄した町や村を再建する。彼らを隷属させた歴代のローマも、スイス中央部という範囲のなかで一定の自治と自由を許した。ヘルウエティー族の気概と勤勉を以後スイス人は誇らしげに語る。一七九八年から一八〇二年までこの民族はヘルウエティア共和国との国名を掲げた。現在の貨幣や切手にもスイスを意味する言葉としてヘルウエチカ (Helvetica) というラテン語しか刻まれていない。

啓蒙思想を代表する哲学者のひとり、クロード・アドリアン・エルヴェシウス (Claude-Adrien HELVETIUS 1715-1771) 以下この人物を哲学者エルヴェシウスとも記す) は、古代のヘルウエティー族に由来する家名を持つ。彼の曾祖父ヨハン・フレデリック・シュヴァイチェル (Johan-Frederic SCHWEITZER 1631-1709) は一六四九年ドイツからオランダに移住し、ヘルヴェチウスまたはヘルヴェチイ (HELVETIUS または HERVETII) と改姓した。(以下この人物を曾祖父エルヴェシウスとも呼ぶ。フランス式の発音では HELVETIUS をエルヴェシウスと読む)

当時は雅号や筆名としてローマ風の名前が好まれ、しばしば通称にも用いられた。彼の旧姓自体もスイス人を意味するドイツ語であり、スイスの一州シュヴィッツ (Schwyz) に語源を持つ。実際にエルヴェシウス家の源流はスイスのルチェルン湖畔、なかでも連邦揺籃の地シュヴィッツにあると言われてきた³⁾。

三代にわたる名医家に関心を抱き、評伝「名門エルヴェシウス家——国王用命の治療」を執筆したL・ラフォンは、こうした伝承に関連してフランドルの聖職者D・モンタヌスの頌辞に注意を促す。それはヨハン・フレデリック・ヘルヴェチウスのスイスの特徴を讀えたものであり、後者の主著「観相医学詳論」の巻末に付せられている。そこに綴られた四行詩はとくに重要な意味を持つらしく、ラテン語、フランス語、英語、スペイン語、ベルギー語という五カ国語で併記されている。

〈スイス〉の容貌を思い浮べなければ、

肖像として描かれた彫りの深い彼の顔立を眺めよ。

彼の精神の営みを根源から辿りたければ、

この完璧な著作を第一に読め⁴⁾。

古代ローマの滅亡とゲルマン民族の大移動ののち、ヘルヴェチー族の子孫はフランク王国や神聖ローマ帝国に併合され、他民族による支配と収奪を七百年以上耐え忍んだ。しかし、封建社会の成熟につれて十三世紀のヨロップは大きな転換期にさしかかる。なかでもスイス中央部の森林諸州、シュヴィッツ、ウーリ、ウンターヴァルデンは神聖ローマ帝国ハプスブルク家に抗し、一二九一年誓約同盟を結ぶに至った。こうした動きを制圧するため、オーストリア大公レオポルド一世は一三一五年シュヴィッツへ大軍を出動させる。しかし、ツーク湖近くの山峡モルガルデンで森林諸州の人民はオーストリア軍を撃破し、独立への道を切り拓いた⁵⁾。

スイス連邦独立の壮挙は、特異な家名の由来とともにエルヴェシウス家のなかで代々語り伝えられたであろう。哲学者エルヴェシウスは主著『精神論』第三篇第二十章で政治形態と民族精神の関連を論じている。この章で彼は道義の頹廃を専制政治の所産と断じ、自由な民族の気概と徳性をつぎのように叙述する。

モルガルテンの戦闘の際には千三百人のスイス兵が、二万人を擁するレオポルド大公の軍勢を攪乱した。

グラリス州ヴェーゼン付近でも三百五十人のスイス兵が、八千人のオーストリア兵に立ち向った。毎年この戦場において記念の祝典が行われる。そこでは彼らを讃える演説がなされ、三百五十人の名簿が読み上げられる。

(二)

哲学者エルヴェシウスの伝記としてもっとも基本的な文献は、J・S・サンランベールの小伝「エルヴェシウス氏の生涯と著作に関する試論」である。サンランベールは詩集『四季』の著者として知られ、エルヴェシウス、ヴォルテール、ルソーなどと親交があった。この小伝の冒頭で彼は哲学者の祖先に関し手短かに述べる。

エルヴェシウスの一家はファルツの出身であつて、宗教改革の時代に迫害され、オランダに定住した。そして、同家の幾人かがこの国で名譽ある職務に就いた。

エルヴェシウス家の来歴は宗教改革と三十年戦争のなかに織り込まれている。サンランベールの記述を基点としながら、ニュージールランドの研究者I・カミングはドイツにおけるエルヴェシウス家の足跡を執拗に辿った。彼の著作「エルヴェシウス——その生涯と教育思想史上の位置」はそうした追跡の成果をつぎのとおり報告する。

一六世紀のドイツにヴァイルゲリウス (VIRGELIUS) という姓の貴族がいた。同家の息子三人のうち長男はカトリッ

ク、次男はルター派であったという。三男はバーゼルで学び、やがてノイシュタットで司祭になる。この三男がシュヴァイチェル (SWETZER) と名乗った。ひとりの息子とともに彼はドイツの東部ケーテンへ移り、高齢で世を去る。息子はバルタザル・シュヴァイチェル (SWETZER または SCHWETZER) と呼ばれ、ケーテンで弁護士をしたらしい。彼はやがてアンナ・ブラウンと結婚し、一六二五年ふたりの間にヨハン・フレデリック・シュヴァイチェルが生れた。一六四九年ファルツからオランダへ亡命し、ヘルヴェチウスと呼ばれるのは、このヨハン・フレデリックである。なお、史料によつては生地をハイデルブルクと伝えられるが、彼は後年自著の見出しにかならずアンハルト侯国ケーテン出身と誌している。また、肖像に付せられた銘文からラフォンは彼の生年を一六三一年と判断する。⁹⁾

こうしてエルヴェシウス家の祖先はアンハルト侯国の首都ケーテンやハイデルブルク大学を擁するファルツ選帝侯国に見出される。いずれもプロテスタンティズム、とくにカルヴィン派が浸透した地方である。アンハルト侯クリスチアンとファルツ選帝侯フレデリック五世はカルヴィン派の盟友であり、前者は高地ファルツの管理代行をも兼ねていた。¹⁰⁾ エルヴェシウス家の人々がアンハルト侯国やファルツ選帝侯国で生活を営んだことも、おそらく信仰や政治の問題と関連する。

農民戦争の敗北とアウグスブルクの和議のあとも、ドイツではプロテスタンティズムがさらに広がった。しかし、イエズス会など反宗教改革の運動も強化され、カトリシズムの拠点バイエルンから神聖ローマ皇帝も選出される。こうした動きに対抗してファルツ選帝侯フレデリック五世は、アンハルト、アンスバッハ、ヴェルテンベルクなどの諸侯と新教同盟を結ぶ。他方ローマ教会の支援を背景にバイエルン公マクシミリアン一世も、旧教徒連盟を築き、ドイツ全土にカトリシズムを強要した。¹¹⁾

やがてボヘミアの国王にイエズス会の教育を受けたフェルディナントが即位する。しかし、フス戦争の伝統を誇る

ブラハの新教徒は、一六一八年偏狹な国王の改宗政策に反発し、ファルツ選帝侯フレデリック五世を対立国王に選出した。しかし、一六二〇年將軍ティリーの統率する神聖ローマ皇帝軍がブラハを攻撃し、新教同盟の連合軍を壊滅させる。さらに皇帝軍はライン河畔の低地ファルツへ進攻し、一六二二年九月にハイデルベルクが、同年十一月にマンハイムが陥落した。¹²⁾

こうしてボヘミアの新国王フレデリック五世は三十年戦争の緒戦で敗北し、王妃とともにオランダへ逃れた。数年前盛大な婚儀を挙げた王妃エリザベスは、イギリス国王ジェームス一世の王女であり、チャールズ一世の姉にあたる。なお、この婚儀を眺めたハイデルベルク大学学生のなかにボヘミアの愛国者コメニウスがいたとされる。

哲学者エルヴェシウスの思想的基盤にはプロテスタントの信仰と苦難が横たわり、フランス啓蒙思想で強調される信仰の自由と寛容の精神は、ドイツ農民戦争や三十年戦争の苦難を底流とする。また、詳細な評伝「エルヴェシウス——その生涯と著作」を著したA・カーンは、エルヴェシウス一家のドイツ的な特徴として普遍性・体系性への志向を挙げている。エルヴェシウスの遺作「人間論——人間の精神的能力と教育」(以下この作品を「人間論」と略称する)にはプロテスタントに同情的な文章が随所で見出される。

カトリック教徒がどれほど怖ろしい攻撃を新教徒に浴びせたか。忠実な臣民に君主が腹を立てるよう、どれほど多くの策略が修道僧によって巡らされたか。そして、胸には憤怒を、腕には武器を携え、王座を攻撃しようと、つねに身構えている叛逆者だけを、彼らのうちに認めさせるため、どれほど多くの技巧が用いられたか。修道僧よ、汝らの正義と愛徳はこのようなものである。帝王を退位させ、王杖とともに生命まで奪う権利を、頻繁に手中にしたのは、ローマ教会とプロテスタント教会のいずれであろうか。また、そうした権利を頻繁に行使したのは、カルヴィン派とカトリック教徒のいずれであろうか。歴史を繙き、ふたつの宗派によってなさ

れた攻撃の数量と種類を計算すれば、たちまち解答が事実から与えられる。

新教徒が君主に戦争を仕掛けた、とひとは言う。そうではない。君主が新教徒に戦争を仕掛けた。私が不当に攻撃されたでしょう。防衛することは自然の権利である。そして、迫害された沢山の人々がかならずこの権利を行使する。修道僧が新教徒の手に武器を渡したのは、君主をして忠実な臣民に怒りを覚えさせるためである。¹⁴

ポヘミアとファルツで皇帝軍は凱歌を挙げ、ドイツの新教徒は壊滅的な打撃を受ける。しかし、新教同盟の背後にはイギリス、デンマーク、スウェーデンなどプロテスタント諸国が控え、他方スペイン王国とローマ教会はハプスブルグ家を支援した。とりわけスウェーデン国王グスタフIIアドルフは一六三〇年バルト海沿岸のポナメルンに上陸し、ライプツヒ、ミュンヘンへと進撃する。こうして勢力を盛り返した新教徒は皇帝軍との死闘を続け、一六四八年のヴェストファーレン条約成立までヨーロッパ列強の介入が繰り返された。¹⁵

三十年戦争によってドイツ全土は未曾有の破壊と荒廃に襲われた。一六三七年イギリスの使節としてドイツを縦断したクロウヌは、つぎのような報告を遺している。ケルンからフランクフルトに至るまで一切の都市と村落と城館が、破壊されるか、掠奪されるか、焼き尽された。美しい都市ノイシュタットも惨憺たる状態になり、餓死寸前の哀れな子どもたちが門口に坐っている。そして、高地ファルツのある村落では二年間に二八回、ときには一日に二回掠奪が行われた、と。¹⁶

第二節 オランダ連邦共和国と曾祖父エルヴェシウス

(一)

スペインの絶対王政に抵抗し、一五八八年独立を達成したオランダ連邦共和国は、一七世紀の中葉に黄金時代を迎える。ここでは各州の代表から成る連邦議会が実権を握り、宗教的にも寛容な政策が維持された。ライデンの毛織物をはじめ、造船、製陶、醸造などの産業が急速に発展し、東方への進出でもスペインやイギリスを凌駕した。¹⁷⁾

一六〇二年にはオランダ連合東インド会社が設立され、その本社がインドネシアのバタヴィアに置かれた。バタヴィアを拠点としてオランダの貿易活動は、南アフリカ、インド、モルッカ諸島、中国、日本にまで及ぶ。連合東インド会社は史上最初の株式会社であり、一七人の重役と七三人の取締役によって経営されていた。こうした出資や経営の中核となったのは、アムステルダムの大商人グループである。¹⁸⁾

自由なオランダへはヨーロッパ各国からあらゆる職業の人々が移ってきた。宗教的な迫害を避けた職人や船乗り、専制的な支配を嫌う商人や医者や学者が、この国の繁栄に寄与する。そこではユダヤ人の哲学者スピノザもホヘミア人の思想家コメニウスも、活動の場を見出すことができた。¹⁹⁾ 学問の自由と安住の地を求め、一六二八年パリから移住したデカルトは、アムステルダムの生活をその書翰に綴っている。

私は毎日群衆の雑踏のなかを散歩しますが、あなたが近くの小道で感じる自由や寛ぎを、ここで享受できるのです。眼に映ずる人々を私は、森で眺める樹木やそこで出逢う動物と同じものと受け取ります。彼らが動き

まわる騒音すら、小川の囁きと同じく、私の夢想を妨げません。ときには彼らの活動を見詰めますが、田畑を耕す農夫をあなたが御覧になるときのように、快い気持を味います。なぜなら、彼らの労働すべてのお陰で、私の住む土地が美しくなり、私が生活の不便をまったく感じないことがよく判るからです。果樹園で果実が生育し、豊かに熟すのを見て悦びが湧くように、インド諸島が産出するあらゆるもの、ヨーロッパで貴重とされるあらゆるものを、豊かに届けてくれる船舶をここで眺めることが、あなたに喜びを与えないでしょうか。生活のあらゆる便宜、手にしたいあらゆる珍奇なものがここより容易に見出せる土地として、世界のどこを選べるでしょうか。これほど完全な自由を享受できる国、これほど不安もなく眠れる国、いつでも防衛してくれる軍隊が控えている国、毒殺や裏切りや誹謗がかくも少ない国、そして、祖先の純朴さがいまだに残っている国がほかにあるでしょうか。²⁰⁾

一六四九年オランダに帰化したヨハン・フレデリック・シュヴァイチエルは、ヘルヴェチウスと改姓するとともに、貴族の称号を捨てた。青年ヨハン・フレデリック、すなわち曾祖父エルヴェシウスはライデン大学で化学と医学を学び、伝染病に関する論文で学業を終える。また、一六五三年にハルデヴィック大学で医学博士の学位を授与された。彼が医業を営んだ土地はアムステルダムとハーグである。²¹⁾

一六世紀に成立した近代医学は、解剖学や生理学の発達に促され、イタリアの諸大学からヨーロッパ各国に浸透する。なかでもライデン大学は斬新な研究と治療面の成果によって名声を博していた。そこでは新たな解剖学や医化学が導入され、臨牀的な訓練、公立病院との連携も重視された。当時ライデンへはフランスからル・ボエ、雅号ジルヴィウスが亡命し、その体液病理説や伝染病治療が人気を集めていた。²²⁾

オランダで曾祖父エルヴェシウスはヨハンナ・ペルス (Johanna PELS) と結婚する。彼女の父ヨハン・ベルナル

ドス・ペルスはアムステルダムの銀行家かつ貿易商人であり、近親のひとりがバタヴィア総督という要職にあった。こうして連合東インド会社の経営に深く係る人々が、エルヴェシウス家の姻戚となる。

連合東インド会社の活動をとおして香料、磁器、砂糖などのほか、安息香、肉桂、丁子、龍涎香、胃石、等々が薬用としてヨーロッパに運ばれた。ライデン生れの学者ポントはしばらくバタヴィアに滞在し、当地の疾病や薬物を研究する。東方の民間薬や民間療法を涉獵するため、曾祖父エルヴェシウスもきわめて恵まれた環境にあつた。天然痘の特効薬（豚石）もそのような研究の成果であり、同家独自の療法として注目される。彼の長男ジャン・アドリアン・エルヴェシウス (Jean Adrien HELVETIUS 1661—1727) 以下この人物を祖父エルヴェシウスとも呼ぶ) も卓越した医者となるが、(豚石) の由来と効能について父親から以下のとおり教えられたと言う。

豚石とはヤマアラシの胆汁であり、この獐猛で残酷な動物は森林だけに棲み、多年性草木だけを食べる。ヤマアラシは馬拉ッカ、ボア、セイロンなどの王国に棲息する。

こうした国々の医者や人民は豚石を珍重し、色々な病氣に対して使うだけでなく、老人のためにも活用する。それが本来の体熱を呼び戻し、血液の鬱積を解きほぐし、生命をなげえ、無病息災を保障してくれる、と彼らが確信するからである。彼らによれば、豚石は驚くべき強壯剤であり、これほど頼りになる医薬はない。(中略)

このような医薬の本質や特性を私は吟味し、いくつかの実験によつてつぎのとおり悟つた。馬拉ッカ王国から運ばれた豚石が、ほかの国で得られた豚石より格段優れ、用いればもちいるほど、好ましく思われる、と。それを高度の蒸溜酒で煎じる代りに、私は病人に飲み易い蒸溜水を利用した。また、普通の発汗療法を併用すると、豚石の効果が一層急速かつ良好に現れることも判つた。

オランダでベストが猖獗を極めた時代に、私は豚石を活用した。そうした投薬を試みる機会が頻繁にあり、多大の成功を収めたわけである。インド人たちが信じているのと同じ効果を、私も豚石から引き出したと言える。⁽²⁵⁾

祖父エルヴェシウスは後年パリで赤痢の特効薬イカベ吐剤を発見し、近代医学史の一頁を飾る。この場合にも近親のバタヴィア総督から知識を得た、とサンランペールは伝える。⁽²⁶⁾

(二)

曾祖父エルヴェシウスの才幹は高く評価され、歴代の統領オラニエIIナツソウ公家で待医長を勤めた。また、彼は連邦議会顧問医官および共和国軍医総監として功績を残した。こうした抜擢がなされたのは、オランダの統治者がなによりも伝染病の流行に苦慮したためと思われる。ヨーロッパ諸国ではマラリア、チフス、赤痢、天然痘が猛威を振り、一六三〇年前後にはベストのためミラノで九万人、ヴェネチア地方で五十万人、ロンドンで人口の過半が死んだ。また、各国の軍隊もしばしば赤痢等の蔓延によって壊滅した。⁽²⁷⁾

ヨハン・フレデリック・ヘルヴェチウスの著作は八冊に及び、その多くはラテン語で書かれている。卓越した臨床医であるとともに、数多くの医学書・薬学書を執筆するという学風が、以後彼の子孫にも受け継がれる。いくつかの論文でヘルヴェチウスはいわば創傷外科の問題を扱い、当時評判になったK・ディグビの《感応粉末》を批判している。⁽²⁸⁾

イギリスの名門貴族ディグビは政治と外交の分野で活躍し、哲学や宗教に関する著作も出版した。彼は端正な容貌、該博な知識、流暢な弁舌によって各国の社交界で喝采を博し、クロンウェルやデカルトとも親交を結んだ。絶世の美

女ヴェネチア・アナスターシャと結婚し、占星術と錬金術に深入りした彼は、妻の麗姿を永遠に保つため、不老の妙薬を造つたと言われる。³⁰⁾

ディグビが喧伝した〈感応粉末〉とは、外傷を治療する薬物である。患部に対してこの粉末は遠くからでも効力を發し、衣服の上に振りかけただけで、重大な出血や負傷を癒すとされた。この神秘的な療法をディグビは一六五八年の講演で發表し、コルネイユやセヴィニエ夫人の信頼を勝ち得た。³¹⁾『名門エルヴェシウス家』の著者ラフォンは薬学博士の学位を持つが、〈感応粉末〉に対する曾祖父エルヴェシウスの論駁を科学的な前進と評価する。

この万能薬はたんなる硫酸鉄にすぎず、太陽に曝して結晶液を除去するか、ときにはトラガントゴムを混合したものであった。

ディグビはあらゆる超自然の輻輳を根拠とし、遠隔作用という理論で説こうとした。周囲の大气に含まれる原子を媒介に、粉末が人間の体内へ溶解し、発散現象を惹き起こすと言うのである。いまだ治療技術は暗闇の淵にあったが、³²⁾ 評判の療法に対するヨハン・フレデリック・ヘルヴェチウスの批判は暗闇から脱した精神の所産と感ぜられる。

近代医学の始源はガレノスの靈氣説や病理論を批判したバラケルススに発するとされ、曾祖父エルヴェシウスの医学もこうした伝統に連なっている。バラケルススが開拓した実証的な解剖理論や特効薬による原因療法は、ハーヴィイの血液循環説とおし一層の発展を示していた。しかし、経験的・実証的な方法を駆使しながらも、曾祖父エルヴェシウスはライデン大学のジルヴィウスに感化され、ガレノスの体質論や体液説を一部撰取している。³³⁾

一六七六年アムステルダムで刊行された『觀相医学詳論』は全卷三〇五頁の大作であり、曾祖父エルヴェシウスの主著と考えられる。この書物では人間の体質が七つの類型に区分され、各々に適合した多様な療法が提示される。³⁴⁾ 彼

は吐剤や瀉血を重視するが、こうした治療は体液の鬱積を主たる病因とみなす理論に基づいている。【観相医学詳論】の論述を紹介したラフォンの一文をつぎに掲げる。

ヨハン・フレデリックは相異なる類型の身体組織を順次詳述し、かかり易い疾患にそれぞれ適切な治療薬を指定する。一般的に言くと、彼は四種類の排泄に訴える。嘔吐、排便、発汗、利尿がそれである。使用される薬剤は男女の別によっても異なる。薬草も同じように扱われる。

彼が指示する吐剤を挙げてみよう。ミンジットの催吐酒石（一六三一年に発見された）、硫化アンチモン（ドイツ人が使用する吐剤）、胆礬（硫酸銅）、皓礬（硫酸亜鉛）。

【観相医学詳論】ではさらに緩下剤や発汗剤について論じられ、ハラタケ、センナ、珊瑚、サファイアなど多種多様な薬物や薬草が列挙されている。ただし、この書物における体質の分類には占星術や隠秘学の影響も感じられ、また巻末で推奨される民間療法も科学的な根拠に欠けるものが多い。³⁶

ヘルヴェチウスにおける合理主義と神秘主義の混合を認めつつ、ラフォンは科学的な医学への貢献を彼の功績と考える。また、A・カーンの見解によれば、ペーコンやニュートンを惹きつけた錬金術は、開拓精神の涵養、観察・実験の重視という意義を持つ。³⁷しかし、そうした秘法は蒙昧な時代の遺物、科学的方法の前身にすぎないであろうか。近代思想と近代利学の夜明け、神秘主義に対する合理主義の勝利という視点だけで、十七世紀の知識人を評価することは、あまりにも単純と思われる。

(三)

ヨハン・フレデリック・ヘルヴェチウスが現代にまで名を留めるは、なによりも著名な錬金術師としてである。た

とえば、名著『鍊金術師』のなかでT・テイラーは、一節をヘルヴェチウスの金属変成にあて、また神秘主義を扱う数多くの論述が、この人物を十七世紀の代表的な鍊金術師に数えている。³⁸

彼は一六六七年にアムステルダムで鍊金術に関する著書を出版した。『金の子牛』と題するこの書物はとりわけ反響を呼び、ドイツ語や英語にも翻訳される。³⁹八つ折版七二頁の『金の子牛』が世人から注目されたのは、著者自身の体験として金属変成の実話を含むからである。高名な医者ヘルヴェチウスは同書第三章でつぎのとおり奇怪な物語を始める。

一六六六年二月二七日の午後、ハーグにある私の家に見知らぬ男がやって来た。質素な身なりをしているが、実直そうで、威厳も感じさせる。中背の面長だが、小さなあばたがすこしある。真つ黒な頭髪で、縮れ毛はなく、顎ひげを持たない。四四歳前後に見え、言葉のなまりから北オランダの生れと思われた。

彼は挨拶をしたあと、きわめて丁寧に私に懇願した。「この失礼な訪問をどうかお赦しください。自分は火工術の熱烈な愛好者です。以前にも友人のひとりとあなたをお訪ねしようと思いましたが、彼はさらに言った。「自分はあなたの論文をいくつか拝読しました。とりわけケルン・ディグビ卿の〈感應粉末〉⁴⁰に対する論駁を読み、哲学的神秘を訝がるあなたの疑念に注目しました。だから、こうしてお邪魔したのです。」

エリアス・アルティスタと名乗るその人物は、数日ヘルヴェチウス家に滞在し、水晶等からルビーやサファイアを造成する方法、赤痢や水腫を全治させる金属液の製法を伝受する。また、硫黄に似た粉末を用いて、彼は石塊を純金に変えた。三週間後にふたたび現れたエリアスは、鍊金術の秘法や戒めを説いたあと、薬剤らしい小片をヘルヴェチウスに与え、そのまま消え去った。⁴¹『金の子牛』の著者はさらに続ける。

「あの男に実際騙されたのではないか」と私は内心呟いた。とはいえ、家内がその薬剤を蠟に包み、私も古

鉛を半オンスに切つて、炉上のるつぽに投げ入れた。鉛が溶けると、家内は小さく丸めた薬剤をそこに投ずる。すると美事に調合したのか、じゅうじゅうと泡立ち、十五分も経つうちに、鉛の塊全部がもつとも良質で、もつとも美しい金に変化した。

たとえオヴィディウスの時代に生きていたとしても、錬金術によるこれほど珍奇な（変形物語）には出逢わないであろう。百の炯眼を持つアルゴスになつたとしても、この驚異的な自然の奇蹟を見極めることはできないであろう。⁽⁴²⁾

ヘルヴェチウスはただちに金銀細工師のもとに赴き、造成された物質が純金であるとの鑑定を受けた。この噂はたちまち拡がり、多数の名士や学者が彼の家に詰めかける。⁽⁴³⁾ なお、このときスピノザも金銀細工師とヘルヴェチウス自身を訪ね、噂の真偽を確かめた。⁽⁴⁴⁾

(四)

エリアスと出逢う以前に曾祖父エルヴェシウスは、古来の錬金術を研究し、完備した実験室を造っていた。一六五〇年に刊行された処女作は錬金術に関するものである。また、『金の子牛』の前半ではバラケルスス、クンラート、ヘルモントなどの理論が紹介されている。⁽⁴⁵⁾ これらの人物は近代医学の開拓者であるとともに、ルネサンス以降の代表的な錬金術師、神秘主義者でもあった。いわゆるヘルメス・カバラの伝統にみずからが連なることを、曾祖父エルヴェシウスは意識していたと思われる。

錬金術、占星術、象徴哲学などメルヘス・カバラ的伝統は、近代科学の前史として扱われるほか、最近では宗教史学、精神分析学、図像解釈などの観点から注目されている。⁽⁴⁶⁾ しかし、こうした神秘主義の意義を社会運動や政治改革

との関連ではじめて明確にしたのは、イギリスの女流歴史学者F・A・イエイツである。とくにその労作『薔薇十字の覚醒』は卓抜な洞見と綿密な論証に満ち、十七世紀ヨーロッパの文化を新しい色調で照らし出す。

イエイツの立論によれば、ヘルメス・カバラ的伝統がひとつの頂点に達するのは、一六一〇年とみられる薔薇十字友愛団の結成、さらには一六一三年になされたイギリスの王女エリザベスとファルツ選帝侯フレリック五世との婚礼であった。薔薇十字友愛団が創設されるにさいしては、パラケルススやクンラートの影響を受けた神秘主義者デーが重要な役割を果たすと推察される。

この秘密結社には色々な隠秘学、錬金術、占星術、象徴哲学が含まれるとともに、ローマ教会への強い反感、千年王国への願望という特徴が認められる。一六一五年に印刷された『友愛団の告白』は以下のような提言を示している。

われらの友愛団はいずれいつかの段階にわけられ、区分されることになっている。この間の事情は、アラビアのダムカール市の住民と同じである。彼らは、他のアラビア人とは、まったく異なる政治体制をもっていた。というのも、ここでは賢者や分別ある人々だけが町を治め、その人々が王の許しを得て、特別の法律をつくっていたからである。この例にならって、ヨーロッパにも同じような政府が制定されるであろう。(中略)

しかしそれは、まずそれに先行すべきことが行なわれ、実現されてからのことである。そしてその時から、われらの喇叭は、大きな音色と高い響きを、高らかに響かせるだろう。いいかえればそのときに、(現時点ではまだ、少数の者によって、しかもひそかに、将来のこととして図や絵でしめされている)事柄が、自由に公然と公表され、全世界がその話題でもちきりとなるだろう。これまでのやり方においてさえ、多くの信心深い人々はひそかに、そしてまったく絶望的に、教皇の圧制をうち破ろうとしてきたのである。

ファルツ選帝侯とイギリス王女の婚儀はヘルメス・カバラ的な式典、造宮、画像、詩文で華々しく祝福された。そ

して、フレデリック五世を反ハプスブルク勢力の中心に据え、ボヘミア国王に擁立したとき、異教的な薔薇十字友愛団の教義がカルヴィニズムとともに政治改革のイデオロギーとされた。新教同盟で参謀格を演じたアンハルト侯クリスチアンは、有名な錬金術師や神秘主義者を庇護しており、薔薇十字友愛団とファルツ選帝侯を橋わたししたと思われる。⁴⁹

とはいえ、ボヘミアにおける政權奪取は無惨な敗北に帰し、一切の領地を失ったフレデリック五世一家は、オランダの姻戚オラニエーナッソウ公家のもとに身を寄せる。こうして〈冬の国王・王妃〉と冷笑されながら、フレデリックは一六三二年に病歿し、王妃エリザベスは知識人や政治家との社交に専念した。一六六〇年の王政復古でイギリスに帰国するまで、エリザベスはこうした亡命宮廷を継続する。⁵⁰フレデリックの遺族とハーグにおける亡命宮廷についてイエイツは簡潔に書いている。

生き残った子息の最年長者であったカール・ルドヴィヒ王子は、選帝侯の称号とファルツ領（その一部が、三〇年戦争に終始符をうつミンスターの講和（一六四八年）で彼の手に戻された）の継承者であった。彼は知的な人物で、教育面や科学の功利的応用面の新思想に敏感であった。そして、彼は、議会派の陣営に傾倒していた。新思想が花開き、また彼の領土回復に関心を抱く友人が多いのもこちらの陣営であった。（中略）

エリザベスがフリードリッヒの寡婦として、イギリス同様ヨーロッパにとつても重要な意味をもっていたことも認識しておかなければならない。ハーグのフリードリッヒのもとには、ファルツやボヘミアや、ヨーロッパ中の悲惨な地域からの亡命者たちが身を寄せていたが、その寡婦のもとにも、同じ境遇の人々が集参しつづけていた。もちろん彼女は、彼らに財政的にはなにもしてやれなかった。しかし彼女は、いわばひとつの観念的な絆だったのである。ハートリブ、デュリー、コメニウスという三人の「外国人」の思想が、君主制専制主義

を脱却しつつあるイギリスにとけこむことができたのも、この絆のおかげであった。⁵¹

なお、フレデリックの長女エリザベスも生来きわめて聡明であり、オランダへ亡命したデカルトにもっとも鍾愛される女弟子となった。また、父母の領地を回復した長男カルル・ルドヴィヒは、ハイデルベルク大学への招請を不遇なスピノザに申し入れたとされる。

こうしてエルヴェシウス家の祖先が残した軌跡は、薔薇十字友愛団の動向やファルツ選帝侯家の道程と驚くほど符合している。アンハルト侯国の貴族として生れ、ハイデルベルクで学んだ人物、迫害を避けてオランダに亡命し、同じハーグで名医の誉れ高い人物、統領オラニエリナッソウ公家の侍医長であり、錬金術師としても有名な人物。このようなヨハン・フレデリック・ヘルヴェチウスにフレデリック五世の遺族がどうして無関心でありえよう。エルヴェシウス家がファルツ選帝侯や薔薇十字友愛団と早くから接触したこと、ケーテンからハイデルベルクへの転居やドイツからオランダへの移住すらそうした脈絡でなされたことも考えられる。

前述の「金の子牛」には薔薇十字友愛団に共通する人体図像と聖刻文字が記されている。また、ヘルヴェチウスとファルツ選帝侯家が親密な関係にあったことは、最後の著作「医療精選」によって証拠づけられる。一六七〇年アムステルダムで刊行されたこの書物は、ライン＝ファルツ選帝侯カルル・ルドヴィヒへの献呈文七頁から始まっている。ファルツの再興にルドヴィヒは美事な成果を挙げ、他方オランダはイギリスとフランスの軍隊に挟撃されつつあった。危機に瀕した祖国をドイツ諸侯と連携させる役割をも、曾祖父エルヴェシウスは担ったと思われる。⁵²

薔薇十字友愛団の教義は千年王国への願望や政治改革への訴えを含み、ベーコン著「ニューアトランティス」、カンパネルラ著「太陽の都」、コメニウス著「世界の迷宮」などのユートピア思想に投影されている。謎に満ちたこの団体はイギリスの錬金術師アシュモールらに引き継がれ、やがて秘密結社フリーメイソンの母胎となった。⁵³ なお、カ

ミングが究明したように、十八世紀フランスにおいて哲学者エルヴェシウスとその夫人はフリーメイソンの有力な会員であった。⁽⁵⁴⁾

(五)

オランダ随一の名門オラニエリナツソウ公家は独立戦争の功績によって初代の統領に選ばれ、連合東インド会社の発展にも尽力した。しかし、第三代統領ウイレム二世が一六五〇年に急死すると、門閥市民を代表するデ・ワイトが勢威を強め、同家を政権から排除する。だが、まもなく長期にわたる英蘭戦争が始まり、スエーデンとの戦火も拡がった。対外侵略を続けるルイー四世も、フランス軍を南ネーデルランドに侵攻させ、一六七二年にはアムステルダムへと迫った。⁽⁵⁵⁾

空前の艱苦に曝されてオランダ国民はデ・ワイトの支配を打倒し、若冠二一歳のウイレム三世に祖国の運命を委ねた。こうして全権を握る統領、陸海軍の最高司令官に就任したウイレム三世は堤防の決壊という秘計によってフランス軍を敗走させ、英仏の連合艦隊をも撃破する。さらに彼はフランスの膨張政策に対抗するため、デンマーク国王、スペイン国王、神聖ローマ皇帝と同盟を結び、イギリス国王ジェームズ二世の長女メアリと結婚した。⁽⁵⁶⁾

ウイレム三世は軍事的手腕と政治的力量を兼備した英傑であり、十七世紀後半のヨーロッパでルイ十四世に比肩する権勢を獲得する。しかし、生来彼は肉体的に虚弱であり、その偉大な功績は摂生と克己の賜物と言われる。歴史家T・B・マコーリはウイレム三世の健康について以下のとおり記述している。

彼の身体組織が異常なまでに繊細であったため、精神の豪胆さがますます印象的に映ずる。幼児から彼は虚弱で病身であった。男盛りの彼は天然痘に襲われ、病患を激化させた。彼は喘息持ちで、肺病患者であった。

その貧弱な骨格は執拗な咳で絶えず揺れた。数個の枕で頭を支えなければ、彼は眠れず、きわめて清澄な大気のもとでのみ、辛うじて呼吸できた。苛酷な頭痛が頻繁に彼を苛んだ。すこし励むと、すぐに疲れた。⁽⁵⁷⁾

こうしたウイレム三世の病状を考えると、侍医長ヨハン・フレデリック・ヘルヴェチウスの責務がいかに重要であつたかが察せられる。各種の伝染病や体質的な疾患を研究した彼、最新の医学をも民間の療法をも駆使する彼は、生来虚弱な統領にきわめて適切な医者であつた。なお、教会や聖職者への信頼が低下するにつれ、しばしば医者が貴顕の相談相手となつた。⁽⁵⁸⁾ ヘルヴェチウスの魔術師的な一面もそのような任務に役立つたにちがいない。また、ウイレム三世も工芸や技術の開発のため錬金術を奨励した。

王政復古によってイギリスに帰り、一六八五年に即位したジェームズ二世は、旧弊なカトリック教徒であり、反動的で独裁的な政治を繰り上げた。貴族から商人や農民に至るまでイギリスの人心は国王から離れ、オランダ統領ウイレム三世とその妻メアリを王位継承者として招致する。一六八八年オランダ兵一万二千人を率いたウイレム三世は、北海を越えて出撃し、ジェームズ二世はフランスに逃走した。こうして名誉革命が達成され、イギリスで立憲君主制と信教の自由が確立する。⁽⁵⁹⁾ オランダ統領ウイレム三世とイギリス国王ウィリアム三世を兼務した英雄に、後年ヴォルテールは最大級の讃辞を綴つた。

祖国の防衛を為し遂げたこと、自然の権利なしにひとつの王国を獲得したこと、国民から愛慕されないでも、王位を保持できたこと、オランダで民意を抑圧せずに美事統治したこと、ヨーロッパの片側ではその精魂となり、頭目となつたこと、將軍の知謀と兵士の闘魂を兼ね備えたこと、宗教的な迫害をだれにも加えないこと、世人のあらゆる迷信を軽蔑したこと、そして素朴で謙抑な品性を有したこと。このような美点や功績を高く評価する人々は、ルイよりもウイレムに大王の名を授けるに違いない。⁽⁶⁰⁾

曾祖父エルヴェシウスも主著「観相医学詳論」をウィレム三世に献呈し、数十頁にわたる献辞と頌辞を捧げている。一六七六年に発表されたこれらの文章は、フランス軍撃退の感激に溢れ、ウィレム三世をアレクサンドロス、ハンニバル、カエサル、アウグストゥスに匹敵する英雄と讃えている。また、偉大な統領が健やかとなり、福祉と繁栄へ国民を導くことが、そこでは祈願されている。⁽⁶¹⁾

一六八九年ルイ十四世はファルツ選帝侯国を攻撃し、ハイデルベルクなどライン流域はまたしても甚大な戦禍を受けた。名譽革命に忙殺されていたウィレム三世は急拠大陸に帰り、ブランデンブルク選帝侯とともにフランス軍に反撃した。海上で彼はイギリス軍に頼ったが、陸上では主としてオランダ軍を動員する。当時のファルツ選帝侯はかつてオランダに亡命していたカルル・ルードヴィヒであり、ブランデンブルク大選帝侯フリードリヒ・ウィルヘルムはウィレム三世の叔父にあたる。⁽⁶²⁾

オランダの盟友となったブランデンブルクは産業の開発や兵制の改革に努め、強国プロシアへ発展する途上にあつた。ここでなされた軍医制度の確立や軍隊衛生の改善は、医学史のうえでも注目するに値する。⁽⁶³⁾ デ・ヴィトなど門閥に汚され、沈滞したオランダ軍を立て直すため、ウィレム三世は叔父ウィルヘルムから多くを学んだと思われる。曾祖父エルヴェシウスが軍医総監を勤めたのも、オランダ軍が再建強化される時期であつた。

一七〇二年に統領ウィレム三世が落馬による不慮の死を遂げた。ヨハン・フレデリック・ヘルヴェチウスも一七〇七年九月二九日ハーグでその生涯を終える。六十年にわたる国家への功勞を讃え、まもなく彼の記念碑が鑄造された。その表面には医術の神アポロンが描かれ、諸金属の化学記号と銘文（迅速かつ正確で、しかも快適に）⁽⁶⁴⁾ が彼を囲んでいる。⁽⁶⁴⁾

オランダでエルヴェシウス家は自由な精神と勤勉な氣風を身に付けた、とカーンは述べる。しかし、この国の黄金

時代はすでに傾き、ヨーロッパの中心はフランスやイギリスに移っていた。こうした趨勢を見越すかのように、彼の息子ジャン・アドリアンは若くしてフランスに帰化し、出藍の誉れ高い医者として同家の名声を揚げつつあった。⁶⁵⁾

〈註〉

本稿における主要な文献に関し、註では下記の略号を使用する。

甲 エルヴェシウス家の人々の著作

- HEd : Johannes Friderici HELVETII, *Diribitorium medicum*, Amstelodami, Johannem—Jansonium à Waesberge, 1670.
 HFm : Johannes Friderici HELVETII, *Microscopium physionomiae medicum*, Amstelodami, Janisonio—Waesbergios, 1674.
 HFv : Johannes Friderici HELVETII, *Vitulus aureus*, Amstelodami, Johannem—Jansonium à Waesberge, 1667.
 HAt : Jean Adrien HELVETIUS, *Traité des maladies les plus fréquentes*, Paris, Laurent d'Houry et Pierre—Augustin Le Mercier, 1703.
 He : Claude—Adrien HELVETIUS, *De l'Esprit*, Paris, Durand, 1758.
 Hh : Claude—Adrien HELVETIUS, *De l'Homme, de ses facultés intellectuelles et de son éducation*, Londres, Société typographique, 1773, 2 volumes.
 Hol : Claude—Adrien HELVETIUS, *Oeuvres complètes*, éditée par L. La Roche, Paris, P. Didot l'aîné, 1795, 14 volumes. (Georg Olms Verlagsbuchhandlung, Hildsheim, 1967)
 N 近世の牛豚の文献
 Ch : Ian CUMMING, *Helvétius, His Life and Place in the History of Educational Thought*, London, Routledge et Kegan Paul Ltd., 1955.
 Kh : Albert KEIM, *Helvétius, sa vie et son oeuvre*, Paris, 1907. (Slackline reprints, 1970.)
 Hn : HOFER, *Nouvelle biographie générale*, Paris, Firman Didot Frères, 1857—1864, 46 volumes.
 Ld : Louis LAFOND, *La Dynastie des Helvétius, les remèdes du roi*, Paris, Occitania, 1926.

Mb : Joseph MICHAUD, *Biographie universelle ancienne et moderne*, Paris, C. Desplaces, 1854-1865. 45 volumes.
Se : Jean Francois SAINT-LAMBERT, *Essai sur la vie et les ouvrages d'Helvetius*, dans Hol tome. I.

- (1) CESAR, *Guerre des Gaules*, texte établi et traduit par L.-A. Constans, Paris, Société d'Édition "Les Belles Lettres", 1984. pp.20-23.
〈参照〉カエサル著 近山金次訳『ガリア戦記』岩波書店、一九六四年。四六一-四九頁。
- (2) *Nouvelle histoire de la Suisse et des Suisses*, éditée par J. C. Favre, Lausanne, Editions Payot, 1986. pp.48-51.
今米陸郎編『中欧史』山川出版社、一九七一年。一四八-一五五頁。
- (3) Id. pp.10-11.
Mb. tome XIX, pp.84. Hn. tome XXIII, p.872.
- (4) David MONTANUS, In effigiem ejusdem. dans Hfm. pp.246-247.
Id. p.10.
また、哲学者エルヴェシウスは大国ローマの隆盛を被征服民族の見地から眺めることができた。青年時代に書かれた哲学詩「幸福」にはつぎの詩句が認められる。
「あの傲岸な征服者、あの壮麗なローマ人を見よ。
彼らの栄光の重圧によって人類が押し潰される。
虐殺を拵げる破壊者の歩みを見よ。
炎上する城壁が彼らの行手を照らし、
平和の殿堂が彼らの眼前で倒壊する。」
- (5) Claude-Adrien HELVETIUS, Le Bonheur. Poème allégorique. dans Hol. tome XIII, p.24.
Histoire de la Confédération par le texte et par l'images, éditée par Eugène, Th. Rimli, Zurich, Stauffacher Publishers Ltd., 1973. pp.72-78.
- (6) He. pp.202. Hol. tome IV, pp.211-212.
- (7) Se. p.1.
- (8) Ch. p.1.

- (9) Ld. p.2 et pl.
- (10) J. P. COOPER, *The New Cambridge Modern History*, volume IV, pp.288-289.
- (11) Georges LIVET, *La Guerre de trente ans*, Paris, Presses Universitaires de France, 1963, pp.11-16.
- (12) COOPER, op. cit., volume IV, pp.310-317.
- なお、哲学者エルヴェシウスは『精神論』のなかでフス戦争におけるポヘミア人の気概をつぎのように書いている。
- 「臨終に際してジシユカが下した命令も勇壮である。カトリック勢力の迫害を受けて、彼は激しい憎悪の念に燃え、同志の人々に命じた。息が絶えたら、ただちに自分の皮を剥ぎ、それで太鼓を作れ。カトリック勢力に対してはその太鼓を打ち鳴らして前進すれば、かならず勝利すると約束できる。」と」
- He. p.308, Hol, tome IV, pp.3-4.
- (13) Kh. p.1.
- (14) Hh. tome I, pp.632-633, cf. Hol, tome IX, pp.114-115.
- なお、『人間論』の各種版本には多数の異文が認められる。本稿における引用は、すべて一七七三年刊行の同書初版に依拠する。この部分でも文中の「修道僧々」以下が、ラロッシュ編『エルヴェシウス全集』では削除されている。
- (15) COOPER, op. cit., volume IV, pp.330-341.
- 林健太郎編『ドイツ史』山川出版社、一九七七年。一九二―一九九頁。
- (16) COOPER, op. cit., volume IV, pp.345-346.
- Maurice BRAURE, *Histoire des Pays-Bas*, Paris, Presses Universitaires de France, 1951, pp.46-53.
- (17) 今来陸郎編『中欧史』山川出版社、一九七一年。二八四―二九三頁。
- (18) 大塚久雄著『株式会社発生史論』大塚久雄著作集、岩波書店、一九六九年。第一巻、三二八―三四一、三五九―三八八頁。
- 科野孝蔵著『オランダ東インド会社』同文社、一九八四年。四―一三頁。
- (19) Robert MANDROU, *Louis XIV en son temps*, Presses Universitaires de France, 1978, pp.251-252.
- (20) René DESCARTES, Lettre a Balzac, le 5 mai 1631, dans DESCARTES, *Oeuvres*, publiées par C. Adam et P. Tannery, Paris, Librairie philosophique J. Vrin, 1974, tome I, pp.203-204.
- (21) Ld. pp. 10-11, Ch. p.1.
- (22) Stephen DIRSAY, *Histoire des universités françaises et étrangères*, Paris, Editions Auguste Picard, 1935, tome II, pp.75-81.

小川政修著『西洋医学史』形成社、一九七九年。五九八―六〇一頁。

(23) Ld. pp.17. Ch. p.1.

(24) 科野孝蔵、前掲書。三五―五三頁。

(25) Hat. pp.231-234.

(26) Sh. p.2.

エルヴェシウス著『精神論』では左記のようにアジア諸国の生活や風俗が数多く語られている。こうした知識のなかには旅行記等によるものだけでなく、周囲からの伝聞もあったに違いない。

「ほかの様々な地域に眼を向けるがよい。謬った判断に満ちみちている。どの民族も己れだけが知恵を持つと信じ、ほかの民族をすべて愚者と考える。そして、たとえばマリアナ諸島の住民のように、世界で言語を持つのは自分たちだけだと確信し、ほかの地域の人々は話すことができないと結論する。*

(原註) *これに関しては『オランダ連合東インド会社の旅』を参照せよ」

He. p.209. Hol. tome III, p.74.

(27) 小川政修、前掲書。六二―八頁。

Fielding H. GARRISON, *An Introduction to the History of Medicine*, London, W. B. Saunders Company, 1929, pp.304-306.
(28) 本稿の主要文献略語一覧で示した以外には、ラフォンヤカーンは左記の書物をヘルヴェチウスの著作として列挙する。

De alchimia opuscula vetterum philosophorum, Frankfurt, 1650.

Mors morborum, Heidelberg, 1660.

Runder Schauplatz der arzneymischen Gesichtskunst, 1660.

Beryllus medicus, Heidelberg, 1661.

Lustiger Spalziergang der Krauter, 1661.

(29) Ld. pp.11-14.

(30) Mb. tome XI, pp.54-55.

(31) Ld. pp.12-13.

(32) Ibid. p.12.

(33) 小川政修、前掲書。二二六―二四六、五九六―六〇三頁。

Charles G. GREENE, *An Introduction to the History of Medicine*. London, Kegan Paul, 1926. pp.285-287.

- (34) HFm. p.1-163.
 (35) Ld. p.15.
 (36) HFm. pp.233-243. Ld. p.16.
 (37) Kh. pp.3-4.
 (38) 後述する文献のほか、たとえば左記の書物がヘルヴェチウスの名を挙げている。
 セルジュ・ユタン著、有田忠郎訳『錬金術』白水社、一九七二年。七六頁。
 カート・セリグマン著、平田寛訳『魔法―その歴史と正体』平凡社、一九六一年。一八四―一八六頁。
 J・K・ユイスマンズ著、田辺貞之助訳『彼方』光風社出版、一九八四年。一〇五頁。
 (39) Ld. pp.13-14.
 Hn. tome XXIII, p.872.
 ヘルヴェチウス著『金の子牛』は散失し、今日閲読できない、とラフォンは述べる。しかし、フランス国立図書館には著者の署名入り初版が所蔵されている。(R.383.31) なお、この所蔵目録でも発行年の記載が誤っている。
 cf. *Catalogue générale des livres imprimés de la Bibliothèque nationale, Paris, Ayleur, Imprimerie nationale, 1919, tome LXX, p.304.*
 また、ヘルヴェチウスの金属造成についてラフォンやカーンは、十八世紀に書かれた左記のヘルメス哲学史をそのまま引用している。
 (40) Nicolas LENGLET DU FRENAY, *Histoire de la Philosophie Hermétique*. Paris, Consteleur, 1742. tome II, p.47.
 HFv. pp.26-27.
 なお、筆者は『金の子牛』の英訳抜粋を含むテイラーの著作、および平田寛らによる同書の邦訳を参照した。
 F. Sherwood TAYLOR, *The Alchemists*. London, William Ltd., 1951. pp.179-189.
 F・S・テイラー著、平田寛ほか訳『錬金術師』人文書院、一九七八年。二一八―二一九頁。
 (41) HFv. pp.27-41.
 cf. TAYLOR, op. cit. pp.180-187. テイラー、前掲書、二二九―三三九頁。
 (42) HFv. pp.41-42.

- cf. TAYLOR, op. cit.: pp.187-187. テイラー、前掲書、二二九—二三〇頁。
- (43) HFv, pp.42-44.
cf. TAYLOR, op. cit.: pp.188-189. テイラー、前掲書、二三〇—二三二頁。
- (44) J・イエレスに宛てた一六六七年三月二五付書翰でスピノザはヘルヴェチウスの錬金術について語る。
「そのあと私はヘルヴェチウスのもとに赴きました。彼は私に黄金や内部に黄金が膠着したるつばを見せ、つぎのように話したのです。溶解した鉛四分の一ポンドと小麦・芥子粒状のものを、このるつばのなかでいま混合したばかりだ。」
Baruch SPINOZA, Lettre a Jelles, le 25 mars 1667. dans SPINOZA, Oeuvres complètes, texte traduit, présenté et annoté par R. Caillois, M. Francés et R. Misrahi, Paris, Editions Gallimard, 1954, p. 1199.
- (45) HFv, pp.17-26.
たといは、
- (46) エリアード著、大室幹雄訳「鍛冶師と錬金術師」せりか書房、一九八六年。
C・G・ユング著、池田紘一訳「心理学と錬金術」I、II、人文書院、一九六七年。
若菜みどり著「薔薇のイコノロジー」青土社、一九八四年。
- (47) Frances A. YATES, *The Rosicrucian Enlightenment*, London, 1972, pp. 41-58.
なお、イエイツの著作からの引用は山下和夫の邦訳による。
- (48) 「友愛団の告白(コンフェシオ・フラテルニタティス)」同書。pp.xxvi-xxvii. Ibid., pp. 254-255.
つぎの書物でも薔薇十字友愛団の教義が要約されている。
マンリー・P・ホール著、大沼忠弘ほか訳「象徴哲学体系Ⅲ カバラと薔薇十字団」人文書院、一九八一年。一七一一—一八八頁。
- (49) イエイツ、前掲書。五五—六八頁。YATES, op. cit., pp. 30-40.
- (50) 同書。一七〇—一七二、二四六—二五二頁。Ibid., pp. 116-117, 171-175.
- (51) 同書。二五〇—二五一。Ibid., pp. 174-175.
- なお、左記の「ハーグ市史」によれば、ファルツ選帝侯の遺族による亡命宮廷は、質素な統領一家、オラニエ＝ナッソウ公家に劣らぬ活気を呈していた。ただし、同家の派手で闊達な振舞に眉を擧める市民も多かったらしい。そうした社交の裏

面では政治勢力の結集や薔薇十字友愛団の連繋が進められたはずである。

- Christine R. WEICHTMANN, *A Short History of the Hague, the Hague, Kruseman, 1878*, pp. 73-75.
- (52) HFV, p.31 et pl. Hfd, pp.2-5.
- (53) イエイツ、前掲書。二二二—二二七、二八八—二九八頁。YETTES, op. cit., pp. 147-151, 206-215. ただし、イエイツはエルヴェシウス家の人々について一言も触れていない。
- (54) Ch. pp.115-132.
- (55) BRAURE, op. cit., pp.58-68.
今来陸郎編、前掲書。二九九—三〇五頁。
- (56) BRAURE, op. cit., pp.58-68.
今来陸郎編、前掲書。二九九—三〇五頁。
- (57) Thomas Babington MACAULAY, *The History of England from the Accession of James II*, Chicago, Donohue, 1890, volume II, p.158.
- (58) 小川政修、前掲書。七一九—七三〇頁。
- (59) 浜林正夫著『イギリス名譽革命史』未来社、一九八一年。上巻、一六八—一九三頁。
- (60) VOLTATRE, *Le Siècle de Louis XIV. dans VOLTATRE, Oeuvres historiques*, édité par R. Pomeau, Paris, Editions Gallimard, 1957, p.809.
- 〔参照〕ヴォルテール著、丸山熊雄訳『ルイ十四世の世紀』岩波書店、一九七四年。三八—三九頁。
- 哲学者エルヴェシウスもオランダおよびイギリスで獲得された自由を称讃する。「ヨーロッパに僅かながら残っている自由は、イギリス人とオランダ人が享受する自由を負っている。彼らがいなければ、どの民族も無知と圧制の軛のもとで苦むであろう。だから、有徳な人間、立派な公民はこれら両民族の自由に関心を寄せる」
- Hh. tome I, p.617. Hh. tome IX, pp.100-101.
- (61) *Johannis Friderici HELVETII, Dedicatio, Panegyricum et Praefatio*, dans HFm.
- (62) 浜林正夫、前掲書。上巻、一六六—一六七頁。下巻、二四—二五一頁。
- MANDROU, op. cit., pp.485-491.

- (63) シンガー・アンダーウッド著、酒井シツほか訳『医学の歴史』朝倉書店、一九八五年。第一卷、一八七頁。
GARRISON, op. cit. p.294.
- (64) Ld. pp.18-19.
- (65) Kh. pp.2-3.